

## 日本がスリランカの独立に果たした役割

セナカ・ウィーララトゥナ（スリランカ弁護士、仏教活動家）

注記：弁護士のセナカ・ウィーララトゥナ氏は、2018年11月14日、日本の国会内（第一議員会館101会議室）で行われたシンポジウムで基調講演を行った。演題は「日本の真珠湾攻撃が、西洋による支配からアジアを独立させる契機となった—アジアが日本に感謝すべき時がきた」。シンポジウムは史実を世界に発信する会が主催した。

多くの日本兵が血を流す犠牲を払って、英国領セイロンを含む西欧のアジアの植民地を解放する道を開いた。ウィーララトゥナ氏は、日本の国会施設でこの日本の偉業に感謝の意を明確に示した最初のアジア人、そしてスリランカ人となった。

彼の主張の要は「スリランカは、1948年に外国の干渉なしに、書簡の交換と政治交渉を通じ、自らの努力のみによって独立を果たしたという仮説は、正されるべき時が来た。英国から観た友好的に独立が為されたという説は、新たな証拠に照らして、もはや正当性を担保できなくなっている」というものである。

本紙に寄港されたウィーララトゥナ氏の論文は、前掲の講演を土台に書かれたものである。

Asian Tribune, Vol.12 No.2860 (Lanka web にも掲載)

---

スリランカは、1948年2月に独立した。他の国が直面したことと比べると、ほとんど努力もなしに（血を流すこともなく）独立を果たしたのだった。インドやビルマ、ケニアやジンバブエ、南アフリカやインドネシア、ベトナムで起こったような大衆による独立闘争もなければ、市民の抵抗運動も、武力紛争もスリランカには起こらなかった。世界中の植民地の人々が手本とし、仰ぎ見るような感化力のある人物、ひとりの世界的な指導者を、スリランカは、その独立以前の解放闘争の時代に生み出すことができなかった。

アジアは偉大な自由の戦士たちを生んだ。マハトマ・ガンジー、ネタージ・セバス・チャンドラ・ボース、インドのサダー・ヴァッラプバーイ・パテール（インドのビスマルクと呼ばれた政治家）、ジャワハルラル・ネルー、ヴィナーヤク・ダーモードル・サーヴァルカル（ヒンズー民族主義の政治家）、毛沢東、周恩来、ホー・チ・ミン、ヴォー・グエン・ザップ（ベトナム人民解放軍総司令官）、ファン・ヴァン・ドン（ホー・チ・ミンの側近政治家）、スカルノ、モハメッド・ハッタ、アウン・サン、ウー・ヌ（ビルマの国粋主義政治家）、ホセ・リーサル（フィリピン独立運動の国民的英雄）。

### 日本の役割

1945年の敗戦以前、ヨーロッパの植民地ではなかったので独立の自由の戦士生み出すことはなかった。にもかかわらず、真珠湾（1941年12月）および他のアジアの西洋植民地への攻撃は、当時ほとんど西洋の植民地支配のもとにあったアジアの人々の心と士気に大き

な衝撃を与えた。さらに、緒戦に於ける日本軍の華々しい戦果は、アジアの自由を求める戦士たちが、外国の占領から解放されるための戦いへと自ら立ち上がり、独立を達成することを手助けしたのだった。

20世紀の初頭、日本は西洋の植民地主義からアジアを解放するために、決然と立ち上がった世界で唯一の国であった。日本は、その挑戦を受けて立つことのできる能力と資源を有していたのだ。『アジア人のためのアジア』は、日本人の大義だった。中国とインドを含む他のいかなるアジアの国も、そのような汎アジア的なスローガンを掲げることもなかったし、実際それを実現できる軍事力も有していなかった。

日本の戦争方針は、既に破綻をしていた西洋の文化や伝統を拒絶することも含め、西洋への依存と決別することだった。その方針は明治維新から徹底して取られ、(西洋に対して)アジア人としての自覚、そして東洋の文明的な価値を、国家の尊厳の源とすることへの回帰であった。傲慢極まりない西洋化の最中であって、国家の存亡に決定的であったのは、政治的、文化的な再生であった。日本のリーダーシップの下で、汎アジア的な連帯を実現すること、それは正に、西欧の帝国主義に抵抗する、新たなアジア新秩序を打ち立てることだった。

当時日本の外務大臣だった松岡洋右は、1940年8月に「大東亜共栄圏」を宣言した。日本のリーダーシップの下で、西洋による植民地支配からアジアを解放しようとの構想は、アジア全土に共感をもたらした。1942年に、米国のハーバート・フーバー元大統領は、「世界中で、白人はヘイトされている。そのことは中国人でも、マレー人でもインド人でも日本人でも同様だ」と述べた。数百年わたり植民地支配者として、白人は有色人種を無慈悲かつ恥辱的に扱ってきたのだから、当然だった。

1905年の日本海海戦に於ける日本の勝利は、オックスフォード大学の講師だった若きアルフレッド・ズィマーン<sup>1</sup>を感化した。担当のギリシャ語の授業もそっちのけに、彼は生徒たちに「最も歴史的な事が起こった。いや、起ころうとしている。しかも我々が生きているこの時代にだ。非白人が、白人に勝利したのだ！」と、訴えた。

20世紀初頭の、このまるで映画のような日本の軍事的勝利が、アジアの知識人たちにどれ程の衝撃を与えたかは、パンカジ・ミシュラの『アジア再興 帝国主義に挑ん志士たち』<sup>2</sup>という彼の著書で、よく論じられている。

---

<sup>1</sup> イギリスの歴史学者、政治学者。ウェールズ大学、コーネル大学、オックスフォード大学教授などを歴任。

<sup>2</sup> Pankaj Mishra, *From the Ruins of Empire: The Intellectuals Who Remade Asia*, Farrar Straus & Giroux, 2012) (日本語訳)『アジア再興 帝国主義に挑ん志士たち』(園部哲訳)(白水社)(2014)

この本は、19世紀末から20世紀初頭のアジアの知識人の意識と、彼らが汎アジア主義、汎イスラム主義、反植民地運動に果たした役割について書かれている。1905年5月、大日本帝国海軍がロシアに勝利した驚愕すべき日本海海戦。その勝利が、植民地支配の席捲する時代のただ中であって、アジアやアフリカの人々を覚醒させる。そこには電撃的衝撃をもって、西洋支配からの解放を果たさんとするアジアの闘争の姿が描かれているのだ。

ジャワハルラル・ネルー、モハンダス・ガンジー、孫文、毛沢東、若き日のムスタファ・ケマル・アタテュルク（オスマン帝国軍人、トルコ初代大統領）を始めとするエジプト、ベトナムなど多く国の国家主義者が、日露戦争での日本の決定的な勝利を、熱い歓喜と共に受け入れた。パンカジ・ミシュラは、「そして彼らは、日本の勝利から同じ結論へと至った。世界の支配者である白人は、もはや、決して打ち負かすことのできない存在などではないのだ」と記した。

ジョージ・カーゾン侯爵（インド総督を務めたイギリス政治家）でさえ、「その勝利の反響は、小聲で囁く東洋の傍観者たちの間に、まさに雷鳴のごとく轟いた」と記している。そしてそれに続く世界大戦は、まさに西洋人がかろうじて維持していた道徳的、政治的権威にすら激震を与えたかのように、アジア人たちの目には映った。ミシュラは、「長い歴史の観点から、西洋の終わりの始まりの調べが奏でられたのは、あの日本海海戦での日本の勝利の時であった」と、結論づけている。

1905年に日本がロシアを敗北させたニュースは、アジア人を歓喜させた。中世以降の世界で、初めて非西洋人が大戦に於いて西洋列強に勝利したのだ。日本の勝利は、西洋による植民地支配に喘いできた人々の心の中に、ほとんど見込みのない夢をもたらした。それは、国としての自由であり、民族の威厳であり、さらには純粋な報復の思いであった。マハトマ・ガンジーはその時に、「日本の勝利の根は、限りなく遠く広い。私達は今、その果実の全てを目にすることはできないだろう」と、抜け目なく遠大な予言をしている。

### 国際連盟での日本の人種平等提案

日本はパリ講和会議（1918-19）に於いて、西洋の植民地支配の下で苦しむ人々の大義のために、国際連盟の設立に携わった。日本は国際連盟規約に「民族や国籍を理由に、法的にも実態に於いても、いかなる差別もなく、全ての点に於いて平等かつ公正な扱いを保証する」という条項を入れる修正案を提出した。ところが恥知らずにも、西欧列強は人類平等という理念を、却下したのだ。白人至上主義と非白人を抑圧した植民地秩序の脅威となることを恐れたからであった。しかし、全ての人種の平等の理念に基づくこの提案によって、日本は、全ての有色人種のリーダーとして、アジアとアフリカの人々の尊敬を得ることになったのである。

第二次世界大戦について、ジャワハルラル・ネルーは、「西洋の民主主義は、変革のためではなく、古い秩序を維持するために戦っていることが一層明らかになった。」と論じた。連合国も枢軸国も戦争の利害を共有していたのだ。それは白人至上主義と、現状の植民地支配を維持することであった。両陣営は、「(白人) 帝国と人種差別」の伝説を擁護し、戦後に於いても「古き帝国主義は機能し続けた・・・」と、記している。

#### 日本の圧倒的な軍事的勝利 1941 - 1942

日本海海戦の勝利の36年後、日本は真珠湾攻撃によって、アジアを支配する西洋列強に、これまでのどのような非白人の国家或いは人々による攻撃よりも、強大かつ決定的な打撃を与えた。1941年12月8日の開戦からわずか90日ほどで、日本はアジアにあった英国、アメリカ、オランダの植民地を一気に制圧し、フィリピン、シンガポール、マラヤ、香港、オランダ領東インド、シャムのほとんど、フランス領インドチャイナ、ビルマを占領した。1942年初頭には、疾風のごとくにインド国境に至った。列強が強奪し占拠したアジア諸国の植民地に日本軍が侵攻すると、アジア全土の植民地の人々が歓喜に沸いたのだった。

1942年初頭、日本軍によってシンガポールが陥落する数日前に、亡命したオランダの首相ペーター・ヘルブランディーは、チャーチルや他の連合国のリーダーに、「日本が白人種へ与えた損傷と侮辱は、直ちに厳しく罰せられない限り、白人の名誉を回復できないほど損うであろう」とその恐怖と不安を伝えた。

マレーシア元首相のマハティール・モハマドは、「ほとんどのアジア人が、ヨーロッパの植民地支配者より劣っていると感じて、独立など実行可能な選択肢だとは、全く考えにも及ばなかった」と語っている。植民地は、「ヨーロッパの原料と天然資源の需要のため」にあり、その需要に依存していた。しかし、日本が英国を撃退すると、我々の世界に対する見方が変わった。「アジア人である日本人」が白人を破ることができること示した。その現実が、「望めばできるかもしれない、という新たな覚醒を私たちにもたらした。我々も日本人のようになれる。我々には、自分の国を治める力があつたのだ。同じ舞台で、西洋人と競えるのだ。」このため日本の占領下での苦難や、戦後に英国が戻ってきたという「すさまじい失望」にも関わらず、私達の「精神的な労役」のかせは壊された、とそうマハティールは記している。

#### 日本への賛辞と感謝の表明

共通の敵に対する日本の圧倒的な軍事的勝利は、アジアの人々をして頭を上げ、誇り高く凜と立つことを教えた。

「第二次世界大戦以前、英国はアジアを植民地にし、人々を奴隷のように扱っていた。英国はインドを180年も統治したのだ。アジアのほとんどの地域から英国を排除したのは、日本だった。そのことで、植民地支配された国々は、独立を果たせたのである。」

「日本は、第二次世界大戦に敗北した。しかし、日本が戦争をしてくれたお陰で、全ての東南アジアの国々とインドが、長年の悲願であった西洋の植民地支配から、戦後わずか15年で独立を果たし得たのである。」

英国の歴史家アーノルド・トインビーは、「日本はアジアに於ける西洋の植民地主義を、完全に終焉させた」と、述べている。さらにトインビーは、「第二次世界大戦に於いて、日本人は偉大な歴史を残した。自分の国のためにではない。戦争の恩恵を受けた国々のためである。それらの国々とは、日本が掲げた短命な理想—大東亜共栄圏—に含まれた国々だった。日本人が歴史に残した最大の功績は、世界の覇権を握っていた西洋人は、『打ち負かすことのできない神々』ではないという事実を白日の下に晒すことに成功したことだった」と、付け加えた。

元タイの首相だったククリット・プラモートは、日本への称賛を表明した。当時、彼は『シャム・ラス』新聞の編集長で、後の1973年に首相に就任している。

「全てのアジア諸国が独立できたことについて、日本に感謝したい。日本というお母さんは、難産で多くの痛みを味わった。しかし、その子供たちは、すくすくと成長し健康で強くなった。」

「東南アジアの国々の国民が、今日、米国や英国と対等な地位を得ることを可能にしてくれたのは誰であったか？それは、日本である。私たち全員に、あたかも母親のように、献身的な行為を施し、自己犠牲の崇高な姿を示された。12月8日（1941年）は、日本というお母さんが大切な教訓を私たちに教えてくれた日なのだ。私達のために自らの生命すらも捧げると、決断をした日であった。」

「さらに、8月15日（1945年）は、私達の愛し尊敬するお母さんが、弱く、病んだ日であった。これらの2つの日のいずれも、決して忘れてはならない。」

<http://www.japanese-greatest.com/mentality-culture/animation/kukrit-pramoj.html>

植民地各国の長期にわたる奴隷状態に慣れて、西洋列強は、日本人が意図的か、意図せずにか解き放ってしまった戦後のナショナリズムを、ひどく少なく見積もっていた。西洋列強は、もともと敵対感情のあった植民地の従属者たちの間にあつて、自らが支配を続けられるかについても、全くの計算違いをしていた。無益な暴動鎮圧や、全面戦争にもかかわらず、特にインドシナでは反植民地運動が、急速かつあり得ない広がりを見せていた。

ビルマは、1935年以前には本格的な国家主義運動がほとんどなかったにも関わらず、1948年に独立を果たした。インドネシアを支配したオランダは、後方支援部隊と米国および英国の援軍によって独立を阻止しようとした。しかし、スカルノにより導かれたインドネシアの国家主義者は、最終的に欧米軍に打ち勝ち、1953年に完全撤退させた。戦後の混乱は、マレー半島、シンガポール、およびベトナムを、長期にわたる暴動と戦争に巻き込んだが、究極的に西洋の撤退は確実なものとなった。

列強諸国で、打ち勝ちがたい強制力や抗しがたい状況なしに、自発的に植民地から撤退をした国はひとつもない。それが事実であったことは、第二次世界大戦が終わったら、オランダとフランスはアジアにあった彼らの植民地を、恥ずかし気もなく取り戻そうとしてきたことからわかる。第二次世界大戦中の日本の占領によって、オランダの植民地支配は終焉させられ、日本人は、ずっと抑圧されてきたインドネシアの独立運動を促進したのだった。

ナチの独裁の支配を受けたフランスおよびオランダ（1940-1944）は、専制政治に反対し、同盟国により解放されたことに歓喜した。しかし、これら2つの植民地支配国は、彼らがヨーロッパで享受した自由を、アジア（そしてアフリカ）で植民地支配をされてきた人々と、分かち合おうなどとは思わなかった。植民地支配者が戻ってきた時、彼らは歓迎されなかった。日本の敗戦後にインドネシアに留まった日本人義勇兵の助けを得て、スカルノの率いるインドネシアは、一連の戦闘の末にオランダを打ち破り、1949年、ついに独立を成し遂げた。同様に、ホーチミンの率いるベトナムは、1954年にディエン・ビエン・フーの戦いでフランスを破り、1954年のジュネーブ協定の下で最終的にフランス軍を全ての仏印の植民地から撤退させた。

#### インド独立闘争に秘められた日本の役割

英国統治下のインド——3世紀に及ぶ過大な課税、不平等貿易、奔放な自由市場形成、そして故意につくられた飢餓——は、防げた飢饉によって数百万人のインド人を死に追いやった。それはよく知られたヨーロッパでのユダヤ人ホロコーストよりも、さらに酷いホロコーストだった。

日本は、（ほとんど知られていないが）インドの独立闘争に決定的な役割を果たした。ネータージー、スバス・チャンドラ・ボースを助け、彼がインド国民軍（INA）を創設するのを支援したのだ。専門の研究者の間では、ボースのINAなくして、インドの独立は決して実現しなかったと、言われている。それと言うのも、INAはコヒマでの戦いと、1944

年のインド・ビルマ国境に沿うインパールで、インド侵攻を目論む日本軍と共に戦い、軍事的には敗北した。しかし1945年には、デリーの法廷で英国の植民地政府と再度戦う機会を得ている。

3人のINAの将校が、レッド・フォート（の法廷）で、反逆罪で裁判にかけられた。このことでインド国民は英国に憤慨し、裁判にかけられたイスラム教徒、シーク教徒、ヒンズー教徒という3人の被告は、植民地支配からの解放者であると主張し、インド国民の共感を得たのだった。

被告側の支援は、英国インド軍の兵士であるインド人にまで波及し、全インドへと広がった。この新たに過激化した部隊は、1946年に英国の占領に反対してストライキを起こし、インド亜大陸の全土に反乱を拡大させたのだった。且つては強固だった英国の軍事力も根底まで揺らぎ、広域に展開する巨大なデモと、1857年のセポイの乱よりもスケールの大きい陸海空の三軍の反乱も予期され、ついに英国当局も撤退の潮時だとの判断を下し、1947年8月15日に、インドの独立を承認した。

インド亜大陸に新たに誕生した2つの民族国家間に終わりなき衝突をもたらしつつも、1947年英国は恥ずかしくもインドを去ることとなった。

ジャン-ポール・サルトルは、フランツ・ファノンの『地球の不運』に寄せた前書きで、「ヨーロッパは、あちこちで激しい水漏れを起こしている」と述べ、「かつては、我々が歴史をつくったが、今では歴史が我々をつくっている」と主張した。

新著 『ボース：インドのサムライ』<sup>3</sup>

軍事史の専門家でもあるC.D. バクシ将軍は、その新著『ボース：インドのサムライ』で、元英国首相のクレメント・アトリーが、「ネタージ（ボースへの敬称）が率いるインド国民軍（INA）は、インドが独立を承認される上で最も重要な役割を果たした。一方で、ガンジーによって導かれた非暴力主義運動は駆逐され、ほとんど影響を及ぼさなかった」と述べている。

この本でバクシは、1956年に時の英国首相アトリーと、当時西ベンガルの治安知事で裁判官も務めたP.B. チャクラボーティーの会話について言及している。労働党党首で英国首相だったアトリーは、1947年にインドに独立を承認する決議に署名をした人物である。彼は、チャクラボーティーの客人としてインドを訪問し、コルカタに滞在している。

---

<sup>3</sup> *Bose: An Indian Samurai: Netaji and INA: a Military Assessment*, by G. D. Bakshi, KW Publishers Pvt Ltd, 2016. 元インド陸軍少将。軍事関係の著書多数。

チャクラボーティーは当時、カルカッタの最高裁判所長官、西ベンガルの知事代理として勤務していた。本には、チャクラボーティーが「私が知事代理であった時、英国によるインド統治から撤退することによって、我々に独立を与えてくれたアトリー閣下と、カルカッタの知事公邸で2日間を共にした。閣下のインド訪問の折のことだった。その時、私は、英国がインド統治を諦めた真の理由について、延々と議論をした」と言及していることが、書かれている。

「私はアトリー閣下に率直に質問した。ガンジーの『クイット・インド（インド統治をやめろ）運動』はまったく先細りになり、1947年に急遽インドを去らなければならないような目新しい状況は、彼の運動には全く生じていなかった。なのに、なぜ、インドを去らなければならないのか、と。」

「するとアトリー閣下はいくつかの理由を述べた。中でも最大の理由は、ネタージの軍事活動によって、インド陸軍と海軍のイギリス王室に対する忠誠心が失われていったことだった」と、チャクラボーティーは述べている。

「議論も終盤になって、私はアトリー閣下に、英国がインドを去る決定に与えたガンジーの影響の範囲がどの程度だったかを尋ねてみた。この質問を聞いたアトリーは、ゆっくりと『m-i-n-i-m-a-l』(最小限)と言葉を発したが、その唇は皮肉な微笑みで歪んでいた」と、チャクラボーティーは付け加えた。

スリランカー西洋のアジアでの植民地支配を終焉させた日本の戦争の受益者

スリランカのアナガーリカ・ダルマパーラは、現代で最初のグローバルな仏教宣教師として際立った存在だった。しかし、ダルマパーラは、先取的な「サワラジ（独立）」運動を、ガンジーやチャンドラ・ボースのようにすることは決してなかった。私達の地元での活動と言えば、手紙を書いたり、論文を提出したり、演説をすることだったが、そうした活動は植民地支配者の決意を挫いたり、弱体化させる効果は全く発揮しなかった。武装闘争だけが、唯一効果を発揮したのだった。1818年と1848年の2度のシンハラ抵抗運動は、残虐的に押しつぶされた。今日でもニュルンベルク裁判によれば戦争犯罪の扱いを受けるだろう。これ以降、スリランカの自由のために、外国の占領者に対し政治的意図をもって武装闘争を行うことは、皆無となった。それにもかかわらず、スリランカには自由がもたらされた。1848年、マタレの反乱で最後の銃声が響いてから100年後のことだった。それは、第二次世界大戦中とその後に、日本によって率いられたアジアの他の国々の兵士たちが、血の犠牲を払うことによって、果たされたのだった。

インドの首相を1947年から64年まで務めたジャワハルラール・ネルーは、1930年代に英国からインドがいつ独立を勝ち取ることができるかを尋ねられ、当時よりはるか

に後の時代となる1970年代の終わり頃になるのではないかと、答えた。

マレーシアでインド国民軍（INA）の先導者を務めたモハン・シン少将は、「英国は、1939年になってさえも、終戦後に我々に完全な自由を保障する空手形すら出すことはなかった。」と述べている。（リーダーズ・ダイジェスト第二次世界大戦の歴史）

ネールの予測よりはるかに早く、1947年にインドは自由を獲得した。1948年にはビルマとセイロンが、それに続いた。その背景には、外的な理由と内的な要因の双方がある。

元セイロンの首相（1956年～59年）だったS. W. R. D. バンダラナイケは、『独立戦争（自由への戦い）』を自分の功績にはしていない。セイロンでは、そんなことは起こらなかったからだ。彼自身は、こう述べている。ある朝ベッドから起きて新聞を読むと、そこには（実質的な独立闘争がなかったのに）英国が独立を承認したとの記事があった。「独立（自由）」に関係する法廷での裁判も、英国と戦ったことで長期投獄をされた者も、セイロンの英国法廷では独立運動に関するただ一つの判決さえも、全くなかった。我々の「闘争」は、植民地支配者の定めた規則に従う一方で、手紙を出すことだけであった。国家のリーダー達（中には英国からナイトの称号を授けられたものもいる）は、スリーピースの西洋衣服を着て、1948年1月4日の独立時にビルマが求めたような完全な独立ではなく、「自治領」の地位を求めただけだった。私たちは完全な自由（独立）よりも、「母国」との絆を保つことを望み、大英帝国の一員として、その「臣民」であることを求めたのだった。

従って、スリランカがいかに独立を果たしたかについては、外的要因と日本が西洋の植民地各国で戦争を遂行し、ついにはアジアに於けるヨーロッパの植民地主義の運命を最終的に封印したことも考慮に入れて、その歴史記述の大筋を書き直すべき時なのだ。20世紀で最も重要な出来事をひとつ挙げるとすれば、それは東洋にあった植民地から西洋が退散したことであったと言うことは、十分可能なのだ。

日本に対して為された大きな間違いを、私たちは正す道徳的な義務を負ってもいる。それはすなわち、日本に対する見方を変えるようアジア諸国に要求することだ。西洋が押し付けた大規模なプロパガンダによって、日本は、他国から略奪をする犯罪的意図を持った侵略者にされた。しかし日本は、西洋の支配から独立するためにアジア諸国の戦う士気に火をつけた光明であったのだ。日本が大規模な戦争を遂行し、日本の兵士が血の犠牲を払ってくれたことにより恩恵を受けたアジア諸国は、いまこそ正当な評価を日本に与える時なのだ。

日本とドイツに戦時賠償を要求したことを含め、第三世界で西洋諸国によって為された犯罪について一切言及せずに、一方的に日本を戦争犯罪国とすることは、正義の逆転に他ならない。

今日では道徳的に実に不愉快で驚くべきことだが、多くの高名な白人のアメリカ人指導者やオピニオンメーカーのみならず、幾人かの卑屈なアジアの政治家や NGO、ネオ植民地主義の応援団長たちが、西洋によるアジアの植民地支配を狭率的に肯定し、アジアの人々が西洋の植民地統治の暗黒時代にどのような集団的経験をしたか、歴史の記憶を検証せずにいることは、西洋の覇権主義を悔い改めずノスタルジーに浸っているにすぎない。

植民地主義と外国による占領は、人道に対する罪を構成する。それは国家の主権の最も深刻な侵害であり、国際法違反である。そうしたことが、アジアのほぼ全ての植民地で、アフリカで、南北アメリカで行われたのだ。植民地を占領した列強によって、人道に反する恐るべき犯罪が遂行された。そうした犯罪者たちは、国際法の下で法廷の場に連れ出され、証言をする責任を有している。ニュルンベルクや東京で裁判が行われたように、西洋列強の植民地支配の犯罪も法廷で裁かれなければならない。

日本は西洋のマニフェスト・デスティニー論を拒絶した

日本が受け入れを拒んだのは、植民地支配を現状の世界秩序として、それを変更したり破壊することは平和に対する罪を犯すリスクがあるものだと固定化されることだった。アメリカ合衆国は、そのドミノン（自治領）を拡大し、（キリスト教の神を信じる民による）民主主義と資本主義を北アメリカ大陸全土に、そしてさらにはアジア太平洋地域に広めることを一神によって一運命づけられた、とする西洋の「マニフェスト・デスティニー」論を拒絶するよう世界を率いたのが、日本だった。

日本のリーダーたちは、不運にも、西洋に反抗したことで最高の罰を受けた。彼らは法廷に立たされた。その法廷は、当事者であるアメリカの判事たちの言葉を借りれば「高級なリンチ」以外の何物でもなかった。ある意味、その裁判は「人民裁判」に過ぎなかった。

世界中の植民地当局者によって、西洋植民地の自由の戦士を法廷に連れ出すために、調査が行われた。肌の色が黒、茶、黄或いは白かを問わず、植民地統治者の政治目的に叶うように、正義が驚くべき一貫性をもって歪曲された。

人々の自由のために戦ったが、武運拙く敗北を喫した戦士たちは、平和や人道に対する罪と戦争犯罪によって訴求され、「勝者の正義」によって裁かれた。

極東国際軍事法廷（東京裁判として知られている）は、過去500年にわたって西洋の植民地で行われた「人民裁判」を、洗練し巨大化したものに過ぎなかった。

戦争はアジアに限定されていたにも関わらず、東京裁判の判事の大多数は西洋人だった。

判事からアジア人を除外すると、当局が示した11人の判事のうち3人は、無神経な植民地主義者で、アジア人が西洋人と平等かつ対等な扱いを主張することに無関心だった。東京裁判は、正義を欠いた邪悪そのものだったのだ。

ただ一人の判事は、モラルと骨のある人物で、裁判の正当性に対し挑戦した。インドのラダビノード・パール判事である。1235ページに及ぶ画期的な意見書で、パール判事は、法廷が不正義で不合理、恒久平和に何も寄与することがないと非難した。

1818年と1848年にスリランカで自由のために戦った反乱軍は処刑され、反乱軍が制していた地域の住民は全て、邪悪な報復を受けた。例えば1942年に、ナチスが占拠したチェコスロバキアのリディツェで無辜の民間人に起こったものとあまり変わらないことが、1818年にはウヴァーで、また1848年にはマタレで実行されたのだった。

石原慎太郎元東京都知事は、1995年に次の見解を述べている。「多くの西洋人が、人権があたかも彼らの道徳の最後の切札であるかのように振舞っていた。彼らの悪行が明らかになり、トランプが崩れるようにその地位が崩壊するまではそうだった。だが偽善を指摘するだけでは、アメリカ人を阻止できない。アジア各国の政府を悩ませ続ける…。」

セイロンは日本を孤立させることに反対した

1945年に日本は敗戦したが、それは英国、フランス、およびオランダが、(古代ギリシャのピュロス王がローマに勝ったように)大犠牲の末にかろうじて得た勝利だった。10年も経ずに、彼らはアジアの植民地を失った。それにもかかわらず、多くの西側諸国が戦争の間に起こされた損害に対して、賠償金の支払いを要求したのだ。

1951年のサンフランシスコ講和会議に於いて、当時セイロンの財務大臣だったジュニウス・リチャード・ジャワルダナは、日本を孤立させることに反対を表明した。彼は、賠償金の支払いという厳しい処罰を課さずに、日本が国際的なコミュニティに再び戻ることを要求した。J.R. ジャワルダナの歴史的なスピーチの傍にいた他の2人は、(ジャワルダナに、仏陀の教え「憎悪は憎悪によってではなく、愛情だけによって止まる。これは永遠の法である。」に沿うよう助言した)当時の首相、ドン・スティーヴン・セーナーナヤカと、当時最初の駐日セイロン大使であったスサンタ・デ・フォンセカ卿(日本の大義の熱烈な支持者で、戦時賠償金の要求をしないという政府決定に裏で影響を与えた人物)だった。

アジア人の心を脱植民地化し、日本への感謝を示せ

我々アジア人が挑戦すべきは、我々自身の心を脱植民地化し、真<sup>さら</sup>つ新たな目で、第二次世界大戦の戦前と戦中に日本が取った行動を見ることである。日本はついには戦争に敗れたけれども、その軍事努力は無駄ではなかった。なぜなら当時アジアの大部分を占領していた

西洋の国々—英国、フランス、オランダ、ポルトガル、米国など—の力を大規模に縮小して、その動きを止めたからだ。西欧列強は、永遠にアジア（の植民地）を捨てることを余儀なくされたのだ。

政治的正義（ポリティカルコレクトネス）の考え方と第二次世界大戦中の日本の残虐行為を暴き出すことが日本に正当な評価を与えることを妨げているのだ。日本が西洋の植民地支配からアジアを解放した、その稀有な貢献こそ、正当に評価されるべきなのだ。

今日、悲劇的にも、20世紀に於いてアジアから西洋の植民地支配を排除するために立ち上がって戦った最初の国である日本の英雄的な貢献と犠牲の伝説は、ほとんど認められず、まったく祝福されることもなく、感謝の念を示されることもほとんどない。

アジアが日本に感謝の意を表明し、歴史の物語を書き換えることに遅すぎるということはないのである。

以上